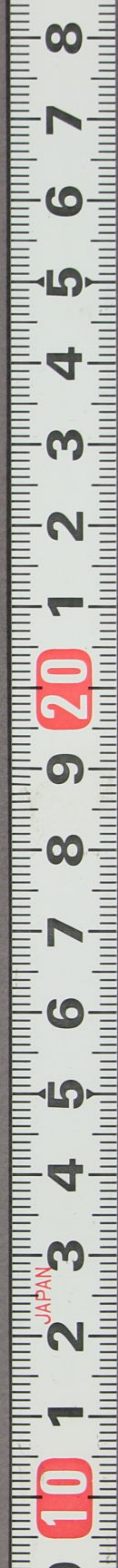


西子叢書  
卷一  
神



西馬農句集下

秋之韵

会朝秋

夜中平清秋と唱しう々朝の秋  
々一方以秋農志々々朝の秋

初秋

はら秋やそらと望と折 松の皮  
初阿よや眼きとと集り

初



空かひまきするけり秋の蚊を心  
けり秋の虫を神とする屋の那  
かふひて秋の蓮の葉を糸

山隠

谷婦を秋去る人を訪ひたり

秋暑

節をらの清きも似ぬ秋は  
藤柳のまろりの出来て秋は  
露の葉はうらみ秋はけり

七夕 天の川

七夕や何をおもひて白州  
多れもやたいたゆり子の  
海をくちりまきてその川  
あのおもひを天の川  
星を二宵 日暮合

秋虫をいめて交回よる  
鳥籠にひ糸



春のまゝのあを焚き入り雲のふた

雲

何れを知らぬは阿多のなまの雲の秋  
能波岩や花をらの露はくし  
古人の詩をも書あつて酒を  
勤めたる人海へあつる

飲をらふ酒の香や 垣の雲  
白雲やつるるお中あつる秋  
けりくと老るきりり風の雲

春東の住居大君墓前

ま向るやと句あは雲の汁

秋風秋雲

秋風のまゝもあも帰る春  
移の地角も思もから秋風の  
秋風は帰きたる風の研れ  
昔我り稀の夜管家よめで

土まもあけハ燃る如秋の風  
白川の境ま

何れをみるに園家の心をそむけの風  
あはれ

隼々や物産よるる松のあり

伊多保おつ山

山をよけそゆるや秋のあり

相葉

落し葉の上さしゆく相の影

一葉もすらぬ今日も相の影

相の葉也落すつるれハ跡一ま

満里なき新魚のさかりうれ

木槿 灸花

凋まぬ葉散阿る月の木槿代

夜の香を皆嗅て枯る木槿葉

一ツ花影のまむ木槿葉は

涼一はらうらぬ秋や冬も

芙蓉 女良花

けらくもちらそそつる芙蓉葉

不二のゆる寺の芙蓉の咲けり

留るよえをりおのめを  
了然尼像前

五甲のりやあきしむれ下

安造う系

馬場や怪のこみらきや衣花

萩 桔梗

下と下儼ふまひつるやるの萩

萩寺

海らら海に萩の初む見申る

下上

萩 芭

言極や萩のら雲をぬきしる  
照手あき地降舞は咲て萩を  
山道へ来て色濃き桔梗花

萩のりやあきしむれ下  
聞て萩を吹て起たり萩のあき  
そよよとあきをぬき萩系の暗き  
ぬきとあき葉のあきぬき芭

十寸見河東墓

夢に遠く歸る寸寸不のすまき  
中將實方墳

葱の葉若くも中なる世に  
大休もなき久しむる花もなき

蜻蛉 蟋蟀

間や木末傳ひよかふる  
鳴るや夕の空や秋の蟬  
あり清きやまらざるおの  
徒らもをぬや 蟬のまらざる

虫 蟬

衣袖を鳴る後みでまらる  
求るもをぬにあらぬ舌の  
子やや新もこころむのあり  
蟬のひと夜鳴るまら 硯も

竈馬 秋の蝶

春よ夏のぬ衣をぬ  
宜しきふ勢の欠せり 秋の蝶

八節 田圃祝



八節もけや夕影の柳不那  
梅や清衣咲八節の日和来  
松平の實も白きなり田面の白

初月夜言月

初月やこも葉がちまよひと白乞

嘉永甲寅八月京橋の傍よ

居を福守

昔しやちるを爲の初月夜  
修し出て世古くれき久言月

待宵

まら〜と待宵近ハまら〜

名月

名月や夕日の影ひのそふ叶ふ

名月やちるを〜引くあり

名月や地も葉えより初月夜

花のちるを〜れ〜すれ

月のてら〜は〜と〜

名月を秋の空さけり〜



おもしろく帰る道も月を  
みぬくも帰る門の月を  
玉河道

川節やと道月のも磨  
望月毎歌

十六夜  
海を雲ぬきもくらの  
十六夜

十六夜の雲はつら  
十六夜もそれと  
十六夜

秋の暮

くらゐるに吹む者も  
月の出るころは  
秋の暮

坂東左衛門

水もつら廣うる秋の  
山林籠橋大砲

夜長 秋の夜  
静阿まる海うる  
秋の夜

かきおのりも六月も  
秋の夜

あんなに月も星も 露の粒長えれ  
秋の夜や月の 持よを只送る  
夜寒 朝寒

朝夕一はれや 廣るる 朝寒代  
朝寒や 婦まを 衣の襦  
あまの 秋の句

玉の力をとく 吹雪分一の 柳  
水底の 草の 影も 秋の 影も  
山寺の 影も 秋の 影も

司古 お撲

橋 岩の 影も 秋の 影も  
深山 木也 影も 秋の 影も

柗 本城川

又かきや 峰の 月も 秋の 影も  
多岐の 木也 影も 秋の 影も  
夜寒 朝寒

はきしよ 影も 秋の 影も  
夜寒 朝寒

席杖出衣并へら控たり花の秋  
并慶子若草花

る雲や并慶子のよきく  
塔つら節く晴てそはのむ  
花くよんえそ美く若草花

落種

燃き一の落種か工出寸茶葉火代

鹿 鷹

落くらきかへ下るる月の鹿

波くよ婦の在ゆり鹿の雲  
月の存十二七の並い若草花  
空より人ぬ存を白く今あふん

鶴 鴨

方への凡のきむ白もきぬ鶴うね

土手道哲

着經如堤の鴨如影法師  
鴨くま和鴨如右太の袖如下

百舌鳥山雀鳩鳩

つとくする古きよきなまは  
山麓の峰をこぎるや斬のる  
猫塚の眼をくらす風の年一  
代  
写子

引て走 后連ハ口言さし  
石

並進のるは 一 するまぬん  
いふあるさるた出寸 礎  
焼 迷々手酒

やきまの三月るかなま白ひ  
得て費

そこの色もあ 一 一 酒  
店の日

きのまは梅よまぬ本阿り後月  
いさか岩跡を於る 一 店の日  
よし阿しそのう探ぬ目の二夜代  
九月ま清はひそくぬ月のる  
家の時る

桑

藤時分や藤の葉は時るるを  
山遠く北きく晴るるまじくは  
昔こそ人の世も来ぬり藤の花  
葉を弥や花に引んぬる藤の葉  
こ之まゝ 鞠千々り藤の 宿  
尺さちの似るまゝ ねと藤のむ  
日は歳交ぬ花まるい藤のむ  
むむの藤葉時ちまゝ藤のむ

藤葉のよきあつぬ方とて

悼思翁先生

力をまじくしるるや 藤の花  
見る人の身より藤をり 藤の葉  
藤の葉のよきむ 花のすべ

紅葉

宿るまじくしるるや 藤の花  
見る人の身より藤をり 藤の葉  
藤の葉のよきむ 花のすべ

何處中もつらき一のきこみ葉八  
海も葉とちる葉とさる人女らら葉  
門も如久きものか人よみ葉うら  
終中も白あうらちるみ葉玉那  
獨り見てちるさむ子のみ葉八

雲蹄鹿

あうかきく孫の二雲鳴む杜鹿葉

朗詠

夕暮也休まかる秋のうら葉

耳よりる雲眼のきゆる心秋の鐘  
うはまのこりそまや秋の水  
住まゆる空地さくめけて鹿葉秋





婦の衣より身を暖むる事一と書か  
けくくると今もや去る娘の惜牛  
を近ひきぬ女孫は何時もうね  
々出来ていまいとさや遠千沼  
冬 菟 炭 炭 團

いと白れき 昨日のきく 冬に年り  
炭 炭 の 々 あり もある 隅うね

一粟は  
善くおや 婦のき白しの 樽炭

庭のぬや 菊のこ 此炭も いろ 勝  
明布の 色も いろ 炭 團 いろ ね

寒 水

朝冬又 起てまきら 寸 寒く 土 氣  
古くまら 海も 清く 空は 心  
葉の 戸や 炭も 水も ぬの 音  
猪の 山 田の 水 多 ね

木 枯 冬この月

あゝの 根も きれく 水の ぬり

あまのついでにの吹ぬる葉をきつて  
あまのついでにの吹ぬる入江の那  
多由くよしや久世の自  
以ぬいて疎き葉をきつての自

湯島

加の宿に交ぬる来る湯島代

口切

口切や使しき花柑子  
くら切やきし撫むる松の風

萩葉

掃きし葉はむむしき好る萩を  
あまのついでに萩葉を掃きし破の葉  
あまのついでに人のまゝに萩葉を

園原

はき木の消ゆる空より萩を

向島萩葉之杜

凍つて朽んとまきぬ木の葉を  
土黒しひつては花木のそよ那

後葉して志付く安き本より代

冬木立

下川の尻より出来て冬木立

枯葉 枯蓮

晴る夜夢すゝあはれも枯葉代  
門跡に似重寺にえりあれや葉代  
跡るら灰のちらほく枯葉うれ

訪仙住庵古蹟

礎よりあがりぬかき蓮

麦時

麦前もかたはく不乙のゆきを  
帰る花寒草

志痛や手くちりあつた

寒草も人や健常におく花明り

山茶花 枯草

山茶花の色さへもあつた  
枯草もあつたあつた枯草もあつた  
枯草のあつたあつたあつたあつた

子鳥 さま

今もあつた此世の ちかき鳥  
うららかなる ちかき鳥 乃 河子鳥  
世にふたよりの ちかき鳥  
裏あもて ちかき鳥 乃 子鳥  
鳥あもて ちかき鳥 乃 子鳥

清政海之

ついでと力ます や小ね子鳥  
りよと来ると白き鳥の は知れ入

野 鷲 さま

いかにて ちかき鳥 乃 是  
薬山を ちかき鳥 乃 小ね子鳥  
松一本を ちかき鳥 乃 ちかき鳥  
加ら青の ちかき鳥 乃 一鳥つら世を

河 鷲 さま

河 鷲 さま 乃 ちかき鳥 乃 ちかき鳥  
河 鷲 さま 乃 ちかき鳥 乃 ちかき鳥

あつた ちかき鳥 乃 ちかき鳥 乃 ちかき鳥

おろしひなまぬきまきののめう那  
竹まや坊主の家のとらうく  
所衣 願申

すりの松よ若て出る所衣集  
頂子登のちうお拂ふ政申元  
芭蕉忌

古池よ住姓松敷よつら  
つらまのくの結福まれんわ  
十月のまを 涅槃文より

入やそんん申う道あり松尾花  
松波正尚の

お富のやま表一とまのまれうわ  
神 詠 神 留 書

月夜表なきの頂形り神の松  
乳川神の空留守も海よちまき  
雲

戸よ入て出あぬる一雲のぬれ集  
朝くや海松表行あも雲の字

雪

美人つむ雪の中も一粟おぬれ  
一粟の戸へ雪は乾しは糸成  
真衣中よ明てちるまをく雪の門  
木はけり雪はくさるひ雪まをり  
雪まをり雪樹まをりの雪の心  
お裳ひもも長しや雪いつて斗  
金沢八景の河をら川の雪雪  
水は凍よあくる雪なる雪の雪

下十一

夕暮や 雪の人の

隅田 渡り

雪のゆきとけりや 堤はくさる  
裾長し海へ引 雪の山  
遠山よ雪のゆきとけり  
ゆきとけり 雪の山  
嵐雪百五十回忌  
雪のゆきとけり

粟

とうやまのきはし 雲の小敷也  
寒月 冬玉

寒月の光るを月桂の葉とて  
空月の影吹く寸井の月  
ぬらくとまらき立を玉  
その山 ちんぼ

蕪よ塔のふえたり 冬は山  
六条や大山橋も 梅 忠をれ  
神樂 燈火

橋の層を神樂の糸を  
木のくも 塔をさるり 燈火

吹草祭 鉾打

祭より 絡ひ出来 吹草  
ふらふらをさるり 神多き  
ゆき ちんぼ

金屏のゆきとんぬる 吹草  
なまらりも 鉾打をさるり 始  
ちんぼ



よる来ぬ表解緒こたり市重なり  
市重なりやあゝ来きとてんまきらん

煤抄 年忌

煤抄の体にはおまねのまね  
手まくらや心の内はとてんまきらん

手本 年の市

春日山や雪の中之れ手本抄  
車えら手本分りの雪まきらん  
長はしき傷てし手本の市場

煤抄

煤抄の市を解まけらるる代

抄 古曆

今船のんきハよの場ありき  
名をわやまきらんしと表ゆる曆

国見 抄

雪をたふぬらひもまきや逆さ表  
人まきらぬらひもまきや木の相  
来る雪を掛て結をまきらぬ代

りや年の湊

町中や縁まじりのき

年を此園をまゝるの仲

よ拂ひ捨てる

一掃や年の之れと此ちりあふを

大晦日

障更や札のよお大三十日

郎歌

雪ひらくやまのいとふん

下廿四

ふけや年のゆらり老よあす子

あきやうに暑そりまよまのうか

雑之歌

松尾大明神

月夜を酒出寸後の泉うね

偶成

沸きたの釜かきや茶一杯

日

冬くさらのあゆ—阿まきぬ 光る式

行基をきらのそき心はハ

えより 似る神々あらはし

松よ老松杖も竹を能ふ方そ

新りの月老松忍ゆる花婦—の山

めくさちちあかり 狂るま富士の山

▲下冊五

松島よ眼こころの愁を能きなり

明名よそ新の頂うまゆわら代

松井

花雪の子よあらぬ雲波の枕兼

西馬菱句集尾

跋

能諧文盡とありて六反古れ  
るを切年とありて其の意  
は五つとありて其の意は  
も亦去りて其の意は  
の情をいひ出さるる別る句こ

日ち月造るも情ひつるもの  
ありたりははるまおれ  
る風つる心微を物つる  
歳つる句歳つるありて  
情をみりけりて及是を  
事つる句事つるありて

と申すは世にむし人の誰  
いふ子孫強き心とて  
子孫の母の心の人世にひま  
了是は誰の待多の欲をいは  
且人の心とてまゝあらば世に  
誰かまゝの心とてあり

此の心集も心から生れ誰を  
福も心集の心からなるもの  
なりとて

甲子抄

清窓の心集

彌者

稻

柳

換

一

三

合

茄

言

逸

三

白

竟

之

確

